

# 沖繩作戦と県民の状況

金城彦

## 目次

### 序論

戦争の直視

国家と防衛体制

戦史研究の重要性

沖縄戦を迎へる迄の概要

### ——第三軍の苦悩——

一、大本営の戦術感覚

イ、再三に亘る指揮系統の変更

それに対する考察

- ロ、陸戦主体の兵力投入
- ハ、第九師団の台湾転出
- ニ、第八四師団の沖縄派遣中止

イ、航空基地建設に就いて

ロ、再三に亘る指揮系統の変更

ハ、第九師団の台湾転出と第八四師団の沖縄派遣中止

沖縄戦に於ける県民の状況

### ——県民の戦闘参加と疎開——

一、県民の戦闘参加

イ、防衛召集

ロ、市町村義勇隊

ハ、学徒隊の組織化

二、非戦闘員の疎開

イ、県外疎開

ロ、県内北部疎開

それに対する考察

イ、非戦闘員の保護に就いて

ロ、疎開の実情

ハ、十・十空襲

二、県内疎開に就いて

沖縄戦は国内戦である

一、作戦準備に対する県民の協力

二、米軍沖縄侵攻の意図

三、祖国の防波堤となった沖縄戦

イ、本土決戦準備成る迄の持久戦

ロ、終戦の契機をもたらした

ハ、県民かく戦へり

## 序論

**戦争の直視**——湾岸戦争で露呈したやうに、平和と言へば日本は武力紛争に巻き込まれず、経済支援だけでよいと受け取れる対処をした。

しかし、平和を守ることが如何に困難であり、希望やスローガンだけでは、どうにもならぬ高価なものであるかといふことを、戦後の我が国は無視してきたように思はれる。

ちなみに、大東亞戦争が終つてからも、果たして世界はどうであつたかを考へてみると、その年から国府軍と中共

軍の支那全土に亘る戦争があり、また仏領インドの民族独立戦、南北分裂後の紛争、マレー半島のゲリラ戦、フィリピンに於けるハックスの反乱、朝鮮戦争、インドネシアとマレーとの数年に亘る紛争、ソ聯のベルリン封鎖、スエズ戦争、中共軍のチベット侵入による国境戦、インドとパキスタンの戦争、レバノン紛争、キューバの危機、南越ヴェトナム戦等々、数へるに暇がない程で、そして最近に至っても湾岸戦争があり、更にその後ソ聯の崩壊によって米ソ関係の変化が顕著になつても、局地戦や紛争は起つてゐる。

とにかく、人類が権力に対する欲求や野心を捨て切れず、世界がなほ力の支配する機構である限り、古い形式の戦争は或いは消へるかも知れないが、革命戦、局地戦、緊張の反復、経済・技術・思想戦、宗教戦、更にはゲリラ戦など、様々な侵略戦は、却つて増大する傾向にある。

思ふに科学技術は、先人の苦心や遺業によつて、飛躍的進歩発達を見たのであるが、人間の性情、欲求にはそれ程の飛躍はなく、ために似たやうな過去の過失をくり返しがちである。しかるに戦争に就いて考究することを忘れ、今は平和と自由と民主主義が殺し文句になつて、感情的な希望やスローガンだけで、それが達成されると錯覚し扇動する傾向にあるが、先に述べた様々な侵略や、場合によつては武力による直接侵略が、一般に気づかない隙を狙つて駆使されることが、絶対に無いといふ保障は何処にもないのである。従つて、世界各国はそれに対処すべく、独自の軍隊を有してゐるのが現状である。

**国家と防衛体制**——我が国も一応自衛隊といふ防衛組織を有してゐるが、一応と言つたのは、誇りある国軍として認知されてゐないからである。

残念乍ら、認知されない原因の根は、アメリカによる日本弱体化を狙つた現憲法の第九条によるものであるが、朝

鮮戦争の勃発により、そのアメリカが治安維持を目的に、我が国に対して警察予備隊を編制させ、それが保安隊となり、やがて自衛隊となったからである。

しかしてその自衛隊の使命は、有事に際しては米軍の來援を柱にしたもので、軍事的には全く不可思議な「専守防衛」となつてゐる。

即ちそれは有事になつても、未然に相手の軍事據点を叩いてその戦略戦術を封じ、以て相手の戦意を挫くといふことは出来ないのであるから、相手が我が領海、領空に出現してから、これに対して防衛するといふことにならう。

斯かる超困難なる使命を背負つてゐる我が自衛隊は、いまだに国から誇りと名誉を付与されることもなく、また一般国民からも真に理解されることもなく、日夜黙々として精進してゐるが、須く憲法を改正して、嚴然たる誇り高い国軍にしなければならぬと切念される。

ともあれ現在の「専守防衛」に於て有事を想定した場合、必然的に国土内に相手を迎へることになることが予想される。さうなれば戦ふのは自衛隊が主になると言へ、国民の総てがこの敵を迎へるのである。絶対に高みの見物は出来ない。

しかるに我国は、いまだに有事を想定しての有事法制や国防に対する機密法（スパイ防止法）もなく、スローガンだけの平和論や防備反対の感情論が横行し、また国会も、相変らず国防の根本に触れた論議はなく、国民に確乎たる防衛意識を持たせる努力など全くないのである。

それは我が家だけは、絶対に泥棒や強盗など入ることがないとして、戸締をせずに寝てゐるのと同じである。

斯くして我国は、国の根幹である防衛といふ最も重要な使命を遂行してゐる自衛隊員に敬意と協力を表することも

なく、徒らに政争の具にして、太平のぬるま湯につかつて良しとする風潮であるが、治にゐて乱を忘れず、備へあれば憂いなしで、言論や思想の自由も、人權の尊重も、総ては国あつてのものであることを肝に銘ずべきであらう。

されば有事を想定して、専守防衛しか出来ないからこそ、爲政者は、自衛隊の軍事専門家による意見等を聴し、戦略戦術上の諸原則、戦闘員の編制・装備・迎撃体制など、更には私有権の制限、交通、通信等の諸般の問題をどうするか、とくに最大なる非戦闘員（老幼婦女子）の保護をどうするかに就いて、真剣に考究した上で、早急に国防の体制を確立しておくべきではなからうか。

この事こそ、国家の戸締りであり、真に平和を維持して、我国が名誉ある地位を保持する道であると思はれる。

**戦史研究の重要性**——国防の体制を確立するには、戦史の研究に負ふところ大である。

とくに現実課題となる統率上の諸問題は、これを机上の論や観念的な構想、計算などで検討しやうとしても、有事に於ける心理的環境や状況などを感じ得るのは困難で、これらを単純なる方程式で把握することは不可能である。

これに對して、最近では色々な科学的手段による分析解明の方法が著しく発達してきたので、これに伴つて戦史のやうな経験的方法是最早時代遅れであるといった論もあるが、もとより有事の実体を予察するためには、このやうな科学的方法も大いに活用すべきであるが、しかし有事を全般的に理解するには、現在でも戦史の研究は極めて重要である。

言ふまでもなく戦史研究の目的は、過去の史実の状況に身を置き、過去の諸問題を深刻に研究することによつて、新しい戦法の創造や、また困難な任務、状況に對処して最良の方策を考察する能力をも養ふことになるであらう。

そこで今日の「専守防衛」といふ拘束下での有事の際、国土内に敵の侵攻を迎へる最大事の想定について、ここで

は非戦闘員（老幼婦女子）を巻き込んで戦はれた沖縄戦をテーマに考察してみたい。

## 沖縄戦を迎へる迄の概要

### ——第三二軍の苦悩——

#### 一、大本営の戦術感覚

#### イ、再三に亘る指揮系統の変更

大本営が実際に南西諸島に着目したのは、サイパン方面が懸念されるに至り、その急速強化のため、南西諸島に多数の航空基地を建設して航空兵力を増強し、これを足場とする航空作戦に依り、米軍を洋上に撃滅するといふ雄大な基本構想を立て、昭和十九年三月下旬、大本営直轄として第三二軍（軍司令官渡辺正夫中將）を新設し、県民の絶大なる協力の許に、夜を日につぐ飛行場建設が行はれたが、その最中の五月・第三二軍は西部軍の指揮下に編入され、更にそれから僅か二ヶ月後の七月十五日、今度は台湾軍に編入されたのである。

#### ロ、陸戦主体の兵力投入

南西諸島に飛行場造りをしてゐる間にも、太平洋方面の米軍は急速な反攻を続け、早くも同年七月にはサイパンに迫つて来た（サイパン玉碎は七月七日）。ここに於て、大本営は初めて南西諸島を米軍の次期攻略目標として重視、七月から八月にかけて、四箇師団、五箇旅団を基幹とする一大陸戦軍を南西諸島に投入し、軍司令

官に牛島満中將（後日大將に昇格）、參謀長に長勇少將（後日中將に昇格）、高級參謀に八原博通大佐が補職された。

以後、この強力なる陸戦主体の第三二軍は、敵の上陸地点を中部の嘉手納海岸と設定し、必勝の信念をもって陣地構築に精進したのである。

しかし第三二軍將兵の士氣に甚大なる影響を与へたのは、（イ）で述べた再三に亘る指揮組織の変更と、更に第三二軍にとって打撃であつたのは、精銳第九師団の台湾転出であつた。

#### ハ、第九師団の台湾転出

米軍の沖縄侵攻が確実に予想された十九年の十一月下旬になつてから、事もあらうに大本営は、台湾軍から二箇師団を比島に転用したのでそれを補強すべく、第三二軍にとって虎子ともいふべき最精銳であつた第九師団を、台湾に転出させたのである。それは地理的に台湾に近いといふ理由だけであつた。

決戦をすべく陣地構築と機動訓練に半歳を費した第三二軍にとって、この第九師団の台湾転出は、結婚式が告別式になるやうな打撃であり、一転して作戦の根本的変更を余儀なくされたのである。

事実、陣地を新らしく構築しなければならず、彈藥その他を移動するのは、筆舌に尽くせない困難を伴ふもので、いまだ戦備が整はない中で、翌二十年四月一日、第三二軍は遂に米大軍を迎へることになった。

#### 二、第八師団の沖縄派遣中止

沖縄防衛の戦史上で、「第九師団引抜き事件」と同様に、「第八師団追送打切り事件」も、敗戦悲劇上の特筆

すべきものである。

それは、昭和二十年一月二十二日、姫路で編成された第八四師団を沖縄に追送することにしており、海没必至との理由で、一日にして大本営が中止したことである。

思へば、再三に亘る指揮組織の変更、第九師団の台湾転出、それによる作戦の変更、第八四師団追送打切りと、相次ぐ不本意を味はされた第三二軍が、胸中の不満を解き得ないままに、独自の作戦を準備してゐる処へ、史上未曾有の米大遠征軍は、沖縄目指してウルシー基地から錨を抜いてゐたのである。

以上、沖縄戦に到る迄の経緯の問題点（戦略戦術）の概要を述べたが、それに対する考察として、次の三点から述べてみたい。

### それに対する考察

イ、航空基地建設に就いて——大本営の南西諸島に対する着目は、戦局を的確に判断してゐなかつた事である。それは昭和十九年三月下旬になってからも、我が国土である沖縄を死守するといふものでなく、そこに多数の飛行場を造って雄大なる航空作戦を展開すべく、そのための建設要員として第三二軍を新設したが、その頃すでに太平洋方面の米軍は急速なる反攻を続け、彼我の海上及び航空戦力は歴然となつてゐたからである。

従つて沖縄に多数の航空基地を建設しても、その後の保持と航空兵力の増強が如何に困難であるかを判断できなかつたのは、これが単なる机上のものであつたと言へやう。

事実、航空兵力の増強どころか、遂に沖縄戦開始直前、第三二軍は、伊江島いへじまの一大飛行場を保持できないとの理由



で、自ら爆破してゐることも明らかであらう。

ロ、再三に亘る指揮系統の変更——第三二軍を大本営直轄として新設しておき乍ら、途中から西部軍に編入し、そして僅か二ヶ月後に、今度は台湾軍の指揮下に編入した。

しかし当時の台湾軍は、台湾自体の防備すら未完成であつたので、台湾軍の関心は自軍主体の観があり、したがって一片の電報命令で第三二軍を指揮下に入れられても、台湾軍としては、沖縄の第三二軍を一体とするには、余りにも時間がなく、何よりも地理的条件からして困難であつた。

当然に第三二軍としては、台湾方面軍に編入されたとき、元に復して大本営直轄を切望したのであるが、事実、懸念した通り、最後まで台湾軍との意志疎通は遂に出来なかつた。

このやうに大本営が、台湾軍の現状を検討することもなく、机上の構想だけで安易に施行したのは、第三二軍首脳の心理に大なる影響を与へ、軍の士気にも影響を及ぼした。

ハ、第九師団の台湾転出と第八四師団の沖縄派遣中止——米軍の沖縄侵攻が時間の問題として予想された昭和十九年の十一月末になつてから、大本営は、事もあらうに第三二軍にとって最精鋭であつた第九師団を、台湾に転出させたのである。

このことは、一転して作戦の根本的変更を第三二軍は余儀なくされ、事実、これまでに構築した陣地を捨てて、地形の異つた他へ師団の移動をするのは大変なもので、特に戦闘を真近に控へて弾薬糧秣の集積された大量を動かし、自軍に適する陣地の改造をするのは、筆舌に尽くせない困難が伴つた。このやうな状況の中で、翌二十年四月一日、遂に第三二軍は戦史未曾有の米大軍を迎へたのである。

ここに於て悔まれてならないのは、引き続き戦局の不利を是が非でもこの沖縄で喰い止め、形勢逆転の要機を掴み得るとしたら、大本営は九師団を台湾に転出させることなく、所要の一箇師は、他の方面から融通する余地は十二分にあつたであらうといふことである。

大本営がレイテ戦後の危機を慮つて、前述の姫路で編制した第八四師団の追送は何としても実現すべきであつたし、それだけでなく自信に満ちて布陣した第三二軍に對し、更にせめてあと一箇師団と弾薬一会戦分でも投入してゐたら、沖縄の一戦は、局勢の転起を活現してゐたかも知れないといふことである。

以上の結論として、伊藤正徳氏の「帝国陸軍の最後」から引用すると、

「比島の決戦も大事であるが、沖縄が国内であることを思へば、更に大切であつた筈だ。このことを戦争常識から考へると、わが国土である沖縄の戦闘は、まさに誇張なき「決戦」として、全力を投入すべきであつたと思はれる。鹿児島から僅か三三〇マイルしか離れてゐないこの国土は、米軍にとつて日本攻略必須の根據地となる以上、国軍の精銳を集中して不敗の勝負に出るのが戦争の本筋であつたらう。沖縄を失つても本土で守るといふのは、近代戦の見地からすれば、大局を見失ふの譏りを免れないのである。

昭和二十年の悲況裡に於ける大本営の判断は、木を見て林を見ない短見となり、所謂「本土決戦」の準備に没頭して、沖縄を二の次、三の次にしたのはなからうか。

沖縄へ爆弾が落ちるのと、東京・大阪へ落ちるのとでは、大本営の感度は同一であらねばならず、沖縄が陥るやうなら、東京・大阪も早晚陥らざるを得ないとの達観は、戦略的眼孔が之を見通さねばならず、そのやうな戦略感覚、達観、透視を任として大本営は存在した筈だが、超非常の形勢に混乱した当時としては、避け難い帰趨であつたのだ

らうか。」と述べてゐる。

事実、昭和二十年初頭の「陸海軍作戰計画大綱」によれば、本土決戦こそ最後の決戦として「決号作戰」と稱し、沖縄は、見捨てられたも同然の「天号作戰」とした。これは沖縄戦の目的が、伊藤正徳氏も言つてゐるやうに、我が国土である沖縄では、まさに誇張なき「決戦」として、陸海軍の全力を投入して不敗の勝負に出るべきであつたのに、遂にその達観はなく、本土決戦が主となり、沖縄はその準備が出来るまで何とか持ち応へるための「持久戦」となつたのである。

以上のことから言へるのは、明治の建軍以来、我が陸軍の伝統は攻撃を旨となし、防禦戦に関しては、その研究も訓練も殆んど念頭に無かつたやうに思はれる。

それは純然たる防禦戦である沖縄戦でも、制海、制空權もなく、兵力の増派もなく、彈藥等の補給もない第三二軍に対し、五月初旬、大本営は総攻撃を打電してゐることも明らかであらう。

更に最も悲劇であつたのは、これも明治建軍以来、国土内に敵を迎へての戦闘經驗がなかつたので、非戦闘員のこととが従となり、作戰が主になつたことである。そのために、沖縄戦では十四萬といふ県民が散華する結果となつた。

### 沖縄戦に於る県民の状況

#### —— 県民の戦闘参加と疎開 ——

一、**県民の戦闘参加**——第三二軍は兵力の不足を補ふため、県民を活用しての増強をはかることにしたが、特に第九師団の台湾転出後は、本格的となつた。その編制は次の通りである。

イ、防衛召集——防衛召集といふのは、戦時または事変等防衛上の必要がある場合に、軍が在郷軍人を召集することを言ひ、その召集は軍司令官に付与されてゐた。

第三二軍は、十九年九月、補充兵（未教育者）の召集を行なひ、それに伴つて同年十月から十一月末にかけ、数千名が第一次として召集された。しかし、第九師団の台湾転出によつて、本格的に戦力の増強が必要となり、第二次として二十年一月から三月にかけて二万五千名といふ多数を召集した。そして第一次召集者と共に、戦闘部隊、遊撃隊、海上挺進隊、特設警備中隊、特設工兵隊等に配置された。

最初は防衛召集規則に基づいて青壮年の健全な男子（十七歳から後備兵役の四十五歳）であつたが、戦局の緊迫に伴ひ、年令の制限を越へて四十五歳以上も、軍歴のあつた者は全員参加した。

ロ、市町村義勇隊——前記の防衛召集とは別に、各市町村ごとに義勇隊を組織し、これらの義勇隊は、戦闘に際し部隊指揮官の指揮下に入り、戦闘に従事することにした。

ハ、学徒隊の組織化——十九年十月十日の大空襲後、戦局が緊迫してきたので、第三二軍の要望により、中学校の下級生に對して通信訓練を、女学校の三、四年生に對しては陸軍病院（地下壕内）および各部隊で看護勤務要員として訓練が行はれた。

しかし、この学徒通信隊、看護隊の召集は、沖縄に米軍が侵攻して全県民が動員される時となつてゐた。

一方、男子中学校の上級生（四、五年）は、戦闘開始と共に各学校の配属將校指揮下に「鉄血勤皇隊」を編制し、直接戦闘に参加することになつてゐた。二十年三月二十六日、慶良間列島に米軍の侵攻をみたので、男子中学校の鉄血勤皇隊、下級生の通信隊は、陸軍二等兵となり、軍人として各部隊に入隊し、一方、女学校の看護隊も陸軍軍属と

して野戦病院へ配属された。

戦闘中に、これらの学徒隊が如何に身を挺して勇戦し殆どが散華したかについては、拙著「嗚呼沖繩戦の学徒隊——原書房刊」を参照されたい。

以上、県民の戦闘参加の概要を述べたが、実際には老人と子供以外は、全県民が軍と共に戦列に加はったのである。

**二、非戦闘員の疎開**——疎開は大別して、**県外疎開**（南九州と台湾）と**県内北部疎開**（山岳地帯で敵の上陸はないものと予想）に分けられる。

イ、**県外疎開**——十九年七月七日、我が国防圏であつたサイパン島が玉碎するに及んで、愈々米軍の沖繩侵攻の公算が増大してきた。そこで政府はその夜、緊急閣議を開き、「南西諸島に居住する老幼婦女子を、急いで南九州と台湾に疎開させること」を決定し、鹿児島及び沖繩県知事に指令した。

この計画では沖繩県から南九州（鹿児島・熊本・宮崎・大分）に八万人、台湾に二万人の計十万人の疎開を予定していた。

しかしこの疎開の実施は強制ではなく勧奨といふ形式であつたので、県民にとっては疎開の必要なことは分つてゐても、決心をするには多くの不安があつた。

それは郷土が戦場となつたとき、残留した一家の柱である男子の玉碎は避けられないだらうし、また疎開したとしても、未知の土地における生活の不安、送金途絶による生活維持の困難、とくに海上輸送中での不安は深刻であつた。

このやうな阻害事項もさること乍ら、第三二軍に対する必勝不敗の信頼感が、疎開を躊躇させる原因として存在した。斯かる状況の中で、勸奨であつただけに、業務を担当した警察署、市町村長、学童担当の教学課視学等の疎開督

励の努力は並々ならぬものがあつたが、なかなか軌道に乗らないのが実情であつた。

そのやうな中で、八月二十二日夜、悪石島<sup>あくせき</sup>西北方（鹿児島から約二六〇軒）の海上で、疎開学童を乗せた「対馬丸」が米潜水艦に撃沈され、一瞬にして学童約八百名が船と運命を共にする悲惨事が起つた。このことは、更に疎開に對しての支障となつたのである。

しかし十月十日、突如として米機動部隊による大空襲があり、那覇市は一日で焼土と化し、県民は物心両面に亘る甚大な打撃を受けるに及んで、情勢の緊迫が感じられ、疎開は逐次県民の協力を得るやうになつた。

しかしてこの疎開は、南九州との航路が途絶する三月初旬まで継続された。

ロ、県内北部疎開——県外疎開を促進する一方で、比較的安全と予想される国頭地区<sup>くがみ</sup>（北部）への疎開も計画された。

しかし国頭地区は元来山地で食糧に乏しく、受入れ態勢も思ふやうには捗らなかつた。その理由としては、第三二軍は殆どが中、南部に展開してゐたので、軍の保護から離れる不安と、もう一つは、住みなれた土地に對する愛着などであつた。

ところが昭和二十年三月二十三日、米軍の砲爆撃が中、南部に對して開始されると、今まで北部への疎開を見合はせてゐた人々も、その夜から一斉に疎開を始めたが、軍は目の前の戦闘準備や戦闘配置に忙殺され、最早この疎開者に對しては車輛の提供や誘導など殆んど出来なくなり、また県当局も打つ手がなく、人々は無統制・無秩序の国頭行となり、混乱はその極に達した。

しかし、やがて苛烈な戦場になるであらう中、南部には、なほ幾十万といふ多数の非戦闘員が残留してゐたのである。

## それに対する考察

イ、非戦闘員の保護について——大本営が、実際に南西諸島の重要性に着目したのは、昭和十九年の二月中旬、我が聯合艦隊の根據地であるトラック島が、米軍の空襲を受けて無力化されてからである。

ここに於て大本営は、サイパン方面の急速強化のために、南西諸島に多数の航空基地を建設して航空兵力を増強し、これを足場とする航空作戦に依り、米軍を洋上に撃滅するといふ雄大なる基本構想を立て、同年三月下旬、大本営直轄の第三二軍（實際は飛行場建設の要員三千名強であった）を新設して、沖縄に派遣したことは前述の通りである。

もしこの時、戦略感覚、達観、透視を任とする大本営が、冷靜に戦局を判断したとするならば、雄大なる航空作戦の構想は南九州と台湾に展開し、沖縄にはその時点で、強力なる陸戦主体の部隊を投入して、伊藤正徳氏の言ふ「誇張なき不敗の決戦」に備へるべきであつたのではなからうか。何故ならば、沖縄は純然たる我が国土であるからである。

しかしそれはさておき、事實は航空作戦によつて第三二軍を新設したのであるから、そこから考察することにしやう。当時沖縄には六十万の日本国民があつた。その中には、老幼老婦といふ非戦闘員がゐたのである。

当然に大本営は、軍の作戦構想と共に、この非戦闘員の保護についても重視すべきで、南西諸島に着目した十九年の二月頃に、非戦闘員の疎開を透視すべきであつたと思はれる。

戦局は日に日に我れに不利であつたとは言へ、十九年の二月頃は、いまだ鹿児島・沖縄間の海上航路については比較的 안전域であつたから、万難を排して海上輸送を短期間でやつてをれば、「対馬丸」の学童八百を初め、海没した幾多の人命は救はれてゐたかも知れない。

ロ、疎開の実情——サイパン島攻防戦に於ける同島住民の悲惨な最期と共に、同島は十九年七月七日、遂に玉碎した。この報に接した政府は、その夜に緊急会議を開き、「南西諸島に居住する老幼婦女子を、急いで南九州及び台湾に疎開させること」を決定し、鹿児島と沖縄県知事に指令したのは、前述した通りであるが、しかし疎開の実施は強制でなく勧奨であつた爲に、県民が疎開に対して遲疑逡巡したのも前述したが、米軍の沖縄侵攻の公算が増大したいま、何故に強制でなく勧奨にしたのだらうか。

もし疎開を強制して実施してゐたならば、沖縄戦に於ける非戦闘員の犠牲は、もっと少なかったものと思はれる。しかしここで特筆しておき度いのは、例へさうであつたにしても、サイパン失陥後の超非常時の形勢に於て、すでに米潜水艦や航空機の跳梁する魔の海を、非戦闘員を疎開させるために、輸送船に駆逐艦の護衛を付け、最後は艦そのもので輸送に当り、十九年七月中旬の第一船から二十年三月初旬の輸送中止まで延べ一七八隻に達し、「対馬丸」の悲劇はあつたが、総輸送人員が七万余名であり、しかもその経費一切を国庫負担にしたことである。

このことは、今後の有事に際しての考究として大事であるが、当時としては、遅まき乍らも、全力を挙げて非戦闘員の輸送に當つたもので、沖縄戦の史実として高く評価すべきである。

ハ、十・十空襲——昭和十九年十月十日、米五八機動部隊の艦載機が延べ一、三九六機を以て南西諸島を襲ひ、軍民に甚大なる損害を与へた。

とくに沖縄の主都である那覇市は、早朝から五波に及ぶ反復攻撃を受け、火の海となつて市街の九割が炎上、一日にして見る影もなく灰燼に歸してしまつた。

この空襲は第三二軍も全く予期できず、それこそ不意を衝かれたので、事前に有効な対応も出來ず、その被害状況



は大旨次の通りであつた。

死亡 六六八名

負傷 八六九名

民家の全焼全壊 一二、五一六戸

船舶の沈没炎上 八十八隻

飯米焼失 四三、六六七俵（県民消費二ヶ月分に相当）

味噌醬油 県民消費一ヶ月半分

更に那覇港棧橋に積まれてゐた兵器・彈藥、車輛、衛生材料、軍需品の損害も甚大であつた。

これを現地では、十・十空襲と呼んでゐる。

そこでこの十・十空襲の考察を次に述べてみたい。

昭和十九年三月下旬、サイパン方面の急速強化のために、第三二軍を新設して、南西諸島に多数の航空基地を建設し、ここに航空兵力を増強して、米軍を洋上に撃滅するといふ雄大な作戰構想を立て、大本営は、沖縄に飛行場造りをしたことは前述したが、米軍を洋上に撃滅する作戰構想ならば、当然に十・十空襲に向つた米第五八機動部隊の動向を未然に予知捕捉して攻撃することができた筈であるのに、それが出来なかつたのは何故だらうか。十・十空襲による甚大な損害を思ふと、余りにも残念である。

驚くべし。この十・十空襲を、最初は第三二軍の高級將校でさへ、友軍の飛来と間違ふ程で、軍事施設や那覇市に爆弾を投下されるに及んで、初めて敵機であることを知る有様であつた。このやうに不意を衝かれた地上部隊は、五

波に及ぶ敵機の跳梁に対して、みすみす国土沖繩を敵機の乱舞に任せたのである。米機動部隊を洋上に於て撃滅するといふ大本営の作戰構想は、机上だけの夢幻であつたのか。

それにしても、十・十空襲に依つて米五八機動部隊の所在を知つた大本営は、押つ取り刀でそれから二日後の十月十二日、この敵機動部隊を攻撃すべく、三百機（練習機も含む）といふ大編隊を以て発進させた。

時すでに遅しと雖も、轟音を響かせて沖繩上空を通過して行くこの友軍機の大編隊を見た軍官民は、我が航空部隊はまだ健在なり、今ぞ沖繩の仇を打ってくれるものと、歡喜して空の雄姿を見送つたのである。

この友軍機こそは、大本営が戦果を大々的に発表した台湾沖航空戦の飛行部隊であつた。しかし、大本営が大々的に戦果を発表したにも抱はらず、米第五八機動部隊は、相変わらず台湾海域を遊弋してゐたのである。

この十・十空襲の時点で、沖繩に敵の侵攻が必至であるのは明白であるのに、地上部隊の増強どころか、それから一ヶ月半後に、第三二軍にとつて最精銳の第九師団を台湾に転出させた大本営の頭腦は、沖繩を見捨てたものと考へる他に理解できないのではないか。

ともあれ沖繩が大空襲を受ける前に、大本営が米五八機動部隊の動向を予知捕捉し、先制攻撃を敢行してゐたならば、或いは那覇市に於ける非戦闘員の犠牲や物心両面の損害、軍事施設・軍需品の損失も最少限に防げたかも知れないのである。

ここでお思はれるのは軍が作戰第一主義で、非戦闘員の保護を第二、第三に置いたことは、十・十空襲を受ける迄、那覇市民の保護について、何ら手を打つてゐなかつたことと、前述したやうに、非戦闘員の県外疎開を十九年二月頃を実施してゐたといふことと、サイパン玉碎と共に疎開を七月中旬から実施したときも、勸奨でなく強制的に施行

してゐたならば、非戦闘員の犠牲は最少限に食ひ止めることが出来たのではなからうかといふことである。

二、県内疎開（北部の国頭地区）に就いて——国頭地区は元來山地で食料に乏しいことはよく分つてゐたのであるから、せめて十・十空襲を受けた時点でも、最早沖縄への米軍侵攻は必至となつた戦局である以上、本格的に非戦闘員の保護を重視し、先づ、国頭地区へ食糧（せめて二、三ヶ月分でも）を確保すると共に、昭和二十年二月初旬を目途として、中・南部の非戦闘員（老幼老婦）を強制的に疎開されるべきであつた。前述した通り、事實は同年三月二十二日、米軍の砲爆撃が開始されてから、これらの非戦闘員は無秩序、無統制のまま、各自で僅か許りの手荷物を持ち、夜を徹して国頭へ独力で行つたのである。

これらの県外疎開、十・十空襲、県内疎開に於ける非戦員の実情を顧みて、現在の「専守防衛下」に於ける有事に際しての国土戦になることを想定したとき、非戦闘員の保護は、最も重要な課題として考へておくべきであらう。

### 沖縄戦は国内戦である

沖縄戦は、紛れもない国内戦であり、その結果、わが同胞二十万が散華したが、一島嶼の攻防戦に於ける戦死者としては例のないものである。ちなみに沖縄戦に投入された米軍は、機動艦隊一千五百二十七隻、地上兵力十八万二千（延べにすると五十万とも言はれてゐる）、航空機五千といふ戦史未曾有のものであつた。

当然に米軍は、如何に我が方の反撃が熾烈であつても、これだけの物量と兵力を以てすれば、沖縄は二週間位で落とせるものと計算した。

しかるに実際には、実に三ヶ月といふ長い期間に亘つて戦ひを強ひられ、しかして米軍は、一島嶼の戦闘で斯くも

出血が甚大にならうとは、夢想もしなかったのである。

一、作戰準備に対する県民の協力——陸戦史研究普及会の「沖縄作戰」から引用してみやう。

「沖縄県民の殆んどが、現役兵あるいは防衛召集兵として戦列に加はり、更に中学生、女学生を初め、軍歴のない者は婦女子迄も防衛隊・義勇隊を編制して戦闘に参加した。

一〇号作戰準備（昭和十九年三月）以来、県民は飛行場の建設・陣地の構築、その他軍の諸作業に絶大なる協力をして、第三二軍の作戰準備に多大なる貢献をした。そして十九年夏以降は婦女子も積極的に参加し、十・十空襲以後は、中等学校男女生徒も学業を中止して、軍の作業に従事してゐた傍ら、通信隊、看護隊の教育を受けて、戦闘参加の準備をした。」とある。

斯くして翌二十年四月一日、米大軍の侵攻と共に、苛烈なる沖縄戦は三ヶ月の長きに亘つて戦はれた。

二、米軍沖縄侵攻の意図——米軍にとって、沖縄への侵攻が如何に困難なものであるか、それはこれまでの戦闘の経験から十分に知つてゐたのであるが、しかし沖縄は日本内地であるだけに、わが方の抵抗はこれまでにない激しいものと予想した。

それでも米軍としては、沖縄を奪つて、そこに強大なる基地を確立し得ない限り、日本本土侵攻は不可能であつたので、万難を排して是が非でも沖縄を落とさねばならなかつた。それで前述の通り、米軍は戦史未曾有の一大戦力を沖縄に投入し、如何に我が方の反撃が熾烈であっても、これだけの物量と兵力を以てすれば、沖縄は二週間位で奪へると計算したのである。

ここで痛感されるのは、伊藤正徳氏も言つてゐるやうに、米軍にとって、沖縄は日本攻撃必須の根據地となる以上、

大本営は、まさに誇張なき「決戦」として、国軍の精銳を集中し、陸・海・空の全力を投入、不敗の勝負に出るのが戦争の本筋であり、沖縄を失っても本土で守るといふのは、近代戦の見地からすれば、大局を見失ふの譏りを免れないのである。

伊藤正徳氏は、更に続けて「昭和二十年の悲況裡に於ける大本営の判断は、木を見て林を見ない短見となり、所謂『本土決戦』の準備に没頭して、沖縄を二の次、三の次にしたのはなからうか（事実はそのやうになった）。

沖縄へ爆弾が落ちるのと、東京・大阪に落ちるのでは、大本営の感度は同一であらねばならず、東京・大阪も早晩陥らざるを得ないといふ達観は、戦略的眼孔が之を見通さねばならず、そのやうな戦略感覚、達観、透視などを任として大本営は存在した筈だ。」と言つてゐる。

沖縄戦を体験した仁位顯氏（当時陸軍中佐で先年故人となる）も、大本営が国土沖縄を、最後の決戦場としてゐたら、絶対に負けることはなかったと、生前に述懐してゐた。

**三、祖国の防波堤となつた沖縄戦**——前述の沖縄を二の次、三の次にしたのは、次のことでも明らかである。  
イ、本土決戦準備なる迄の持久戦——それは昭和二十年初頭の「陸海軍作戦計画大綱」に依つて、本土決戦を「決号作戦」とし、沖縄を本土決戦準備なる迄の持久戦として採擇したことである。

しかし実際には、大本営は「作戦計画大綱」の採擇に関係なく、昭和十九年三月下旬の第三二軍新設のときから、沖縄を最後の決戦場として考へてはゐなかつたのではなからうか。

それは前述の「沖縄作戦の概要（イ・ロ）」で述べたやうに、第三二軍を大本営直轄としておき乍ら、一ヶ月余で西部軍に編入し、更に二ヶ月後に台湾軍へ編入するといふ指揮組織の一貫性を欠き、何よりも不可解なのは、十九年

十月十日の沖縄への大空襲で、最早米軍の沖縄侵攻は必至であつたにも抱はらず、十一月下旬になつてから、第三二軍の最精鋭であつた第九師団を台湾へ転出させ、そして姫路で編制した第八師団の沖縄派遣も中止をしたことである。このやうな中で、第三二軍は昭和二十年四月一日、遂に米大軍を迎へたが、軍官民一体の凄絶なる防戦によつて、当初二週間位で沖縄を落すことが出来ると計算した米軍は、予期に反して、実に三ヶ月といふ長い期間を拘束されたのである。

ここで特筆すべきは、昭和二十年初頭に「本土決戦」を採擇したものの、実際にその準備に入つたのは同年の三月下旬頃からで、漸く一応の目度<sup>めど</sup>がついたのは七月に入つてからであつた。

思ふべし。この期間は、まさに沖縄で米軍を拘束してゐた期間（三月下旬から六月二十三日に到る間）で、紛れもなく本土決戦準備は、この期間を利用してなされたのである。

もし假りに、米軍が当初計画してゐた通り、沖縄が二週間位で落ちてゐたとしたら、本土決戦の準備いまだ成らざる中に、米大軍は間違ひなく怒濤の如く日本本土に侵攻してゐたであらう。その結果は、想像を遙かに絶する血が山河に流れたものと推察される。

それを思ふとき、よくぞ沖縄戦の軍官民は、祖国の防波堤となつて防戦し、米軍を三ヶ月も拘束してくれた。このことは、後世の歴史に特筆して留めねばならぬものである。

口、終戦の契機をもたらした——沖縄の一島嶼で、夢想もしなかつた三ヶ月といふ長い期間を拘束され、そして甚大なる出血を強要された米軍は、日本本土へ侵攻したならば、如何に犠牲が大であるかを、嫌といふ程に思ひ知らされた（事実、米軍は百万から二百万を失ふであらうと推測した）。

斯くて米国は、対日戦に終止符を打つべく模索するやうになり、ソ聯、英国、中国などの首脳と協議して、例のポツダム宣言を我が国に提示したのである。それを受けて、いろいろと苦悩した結果、我が国は御聖断によってその宣言を受諾（ポツダム宣言は、ドイツのやうな全くの無条件でないので、我が国は無条件降伏でなく、終戦である）し、ここに昭和二十年八月十五日となった。

このことは、沖縄戦で、十五対一とも言はれる物量の差があつたにも抱はらず、苛烈なる砲爆弾雨下に、身を抵して勇敢闘した軍官民が、実に三ヶ月をも米軍を拘束して甚大なる出血を強要したために、米軍をして日本本土侵攻に対する絶大な恐怖心をもたらしただからで、沖縄戦のわが同胞は、まさに祖国の防波堤となり、一億国民の身代りになつたのである。

ハ、県民かく戦へり——沖縄戦に於て、老人と幼児以外は、婦女子を含む殆んどの県民が戦列に加はつたことは、先述したので省略するとして、ここでは軍首脳の言葉を記すことにしやう。

(1) 牛島軍司令官は、自刃される前に側近に対し、「もし日本本土が戦場になつても、沖縄県民のやうな協力はおそらく得られないであらう。」と語つてゐる。

(2) 歩兵第六四旅団長有川圭一中將の碑文に、「石部隊第六四旅団は、沖縄県民の絶大なる協力を得て奮戦力闘して來たが……。」と記されてゐる。

(3) 小嶽地区を死守して玉碎した海軍部隊の司令官大田実海軍少將（後に中將となる）は、戦闘指揮所地下の幹部室で、自決をされるに際し、海軍次官宛に最後の長電を打つてゐる。その概要を記すと、

「沖縄県民の実情に關しては、県知事より報告せらるべきも、県には既に通信の方途なく、三三軍指令部も、ま

た通信の余力なしと認められるにつき、本職、県民の現状を看過するに忍びず、緊急御通知申し上げ。

沖縄県に敵が攻略を開始以來、陸海方面とも防衛戦闘に専念し、県民に關しては殆んど顧る暇なかりき。然れども、本職の知る範圍に於ては、県民は防衛召集を受けて戦列に加はり、残る老人と幼児のみが、相次ぐ砲爆撃に、家屋と財産の総てを失ひ、僅かに身をもつて、軍の作戦に支障なき小防空壕に避難するも、なほ砲爆撃下にあつて、風に曝されつつ、死線を彷徨<sup>さまよ</sup>いたり。分けても、若き婦人の如きは、率先して軍に身を捧げ、看護・炊事はもとより、砲彈運び、挺身斬込すら申し出るものあり。看護婦に到りては、軍移動に際し、衛生兵すでに出発し、身寄りなき重傷者を助けて献身せり。

これを要するに、陸海軍沖縄に進駐以來、県民は御奉公の一念を胸に抱きつつ、遂に報いらることなくして、本戦闘の末期を迎へ、実状は形容すべくもなく、一木一草焦土と化せん。

沖縄県民かく戦へり。

県民に対し、後世特別の御高配を賜らんことを。」

とくにこの「沖縄県民かく戦へり」の長電は、歴史的に不朽なものとして、日本国民が肝に銘すべきであらう。

## 結 論

沖縄戦は、紛れもなく当時の同胞が、落日の中に於ても、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるといふ烈々たる愛国心があつたからで、それは歳月風霜も、また如何なる人爲的手段も、絶対に消すことの出来ない歴史的事実である。

翻<sup>ひるがへ</sup>つて現在の国情をみるとき、この愛国心はタブーとなり、軍備と軍国主義を混同し、無防備すなわち平和と錯



覚する觀念論があつて、民族共同体たる国家の存在を輕視し、国家意識も民族精神も失はれ、国防の意志も希薄となり、いまだに有事を想定しての法制もない有様である。

独立国とは、「他国の權力に従属せず、自国の意志によつて行動の自由を有する国家」であるが、そのための本質的条件として、一つは国内治安維持であり、他の一つは国土防衛である。即ち自衛權は国家固有の權利であつて、自衛權を行使するための軍備は、国の存立上不可欠の本質的要件であるから、これを否定するのは、国の独立を否定するものに外ならない。

要するに、「自分の国は自分で守る」といふ不動の国民意志と、精強なる防衛軍があつてこそ、国の安全、平和、独立は保持できるのであつて、国防は他力本願では絶対に不可能であり、自国の命運を決するのは自国を措いて他にはないのである。

以上の観点から有事を想定するとき、沖繩戦に於ける戦略戰術上の諸問題を初め、とくに非戦闘員の保護など、冷静に考察すると共に、当時の軍官民が、烈々たる愛国心を有し、実に三ヶ月も米大軍を拘束して勇戦したその精神を肝に銘ずべきであらう。

今や我が国は、經濟の面では驚異的發展を遂げたが、果たしてそれで名実備はった独立国と言へるであらうか。今なほ精神面や、政治、国防の面では、アメリカによる占領政策の殘滓が滯留して榮養失調の状態である。

この憂ふべき現状を是正するためには、自衛軍の保有に就いて疑問の起らぬやう憲法を改正し、そして国民の防衛義務を規定し、更には独立国としての存立不可欠の本質的要件である愛国心を、学校教育の場で重視すべきであると痛感される。

その意味に於て、国土内での沖縄戦は、現在の日本人にとって多大なる教訓を与へてゐるのではなからうか。